

スキルアップ通信 VOL.172

「おはよう」が言えない人に「人の気持ち」はわからない…

“挨拶”という言葉に込められた「ブッダの教え」とは

普段、何気なく使っている言葉の意味を考えたことはあるだろうか。復蔵寺住職で YouTuber の大愚元勝さんは「実は仏教にルーツをもつ言葉が多い。例えば『挨拶』は師匠が弟子の悟りの度合いをはかる問答のことを指す。ここにもブッダの教えが込められている」という――。

実は仏教にルーツがあるビジネス用語

実は「経営」は仏教の言葉である。また「経営」に限らず、ビジネスの場面で用いられる言葉の中には、仏教の言葉が多く存在する。ぜひ一人でも多くの経営者、そしてビジネスパーソンに、それらの言葉本来の意味を知っていただき、会社の経営や自身の生き方、働き方に役立てていただけたら幸いである。

「経営」は永く、丈夫で、美しい布を織る営み

「経営」という漢字の「経」の字をよく見ていただきたい。

お経の「経」だ。では「経」とは何か。昔、まだ今のような製本技術が発達していない時代に、ブッダの教えを記した紙を束ねるために縫ったその縦糸が「経」である。そして「経本」にはブッダが説いた「苦を離れて幸福に生きるための真理」が書かれている。

つまり経営とは、「心理の縦糸に、創意工夫の横糸を絡ませながら、永く、丈夫で、美しい布を織る営み」のことなのである。

朝の「挨拶」に隠されている本音

「挨拶」もまた、仏教の言葉である。

挨拶の「挨」とは「推しはかる」「近づく」「触れる」といった意味で、「拶」には「せまる」「切り込む」という意味がある。

古来禅宗では、師匠が弟子に何気ない言葉や動作を投げかけ、その返答を持って、弟子の理解（悟り）の度合いをはかるといったことが行われてきた。そのような問答を「挨拶」と呼んだ。

例えば、会社に出勤して出会った同僚への「おはよう！」に対して、返ってくる「おはよう」の声が小さければ、「あれっ…何だか今日は元気がないな」と、相手の心情や体調を心配する。

例えば、家に帰って放った「ただいま！」に対して奥さんから返ってくる「おかえり」のテンションが低ければ、「あれっ…俺なんかやらかしたかな」と、自分の行動を振り返ってみる。

そんな経験が誰にでもあるはずだ。言葉を交わしながら、そこに言葉でない「何か」も交わされている。それが人間のコミュニケーションだ。そして、その言葉でない「何か」のほうにこそ、相手の本音が隠されていたりする。その「本音」に切り込んでゆくこと。それが禅の「挨拶」なのである。

「投機」は禅問答を意味する言葉

「投機」といえば、短期的な価格変動での売却益を狙って行う投資のこと。損失を見込み危険を顧みず大利益を得ようとする行為ともいえる。

ギャンブルではないにしても、そのような行為を意味する言葉が、仏教の言葉だと聞いて、意外に思う人もあるはずだ。しかし「投機」もまた仏教の言葉である。「投」は文字通り投げるという意味であり「機」は心の動きを指す。師匠が弟子に問いを投げ、弟子がその問いに答える。また弟子が質問を投げかけ、師匠がその質問に答えたり、答えずに考えさせたりする。そのような無限の掛け合いを通して、師匠は弟子を導き、弟子は次第に悟りの高みに達してゆく。その禅問答を意味する言葉が相場に使われるようになったのだ。市場は、株や通貨などをその価格で買いたい、売りたいという、さまざまな思惑を持った売り手と買い手が集まって問答を繰り返し、価格が決定されてゆくからである。

スキルアップ通信 VOL.172

ブッダは教えが「流通」することを望んだ

流通とは、消費者から生産者までの商品やサービスの流れのことを指す。しかし、これも仏教の言葉だ。「流通」は元々「るつう」または「るづう」と読み、仏の正しい教えが広く伝わっていくことを意味する。ブッダは正しい仏法が広く伝わることによって、安穏豊楽な社会が実現することを望んだ。

本来の「利益」は他を益すること

経営者は常に、いかにして会社の利益を最大化するかを考えている。経営者でなくとも、人々の関心も常に「自分の利益」にある。この「利益」も、実は仏教の言葉だ。ただし仏教では「りえき」ではなく、「りやく」と読む。そう、ご利益（ごりやく）と呼ばれるものだ。

多くの人は、受験合格、無病息災、家内安全、商売繁盛など、祈り、祈ってもらうことによって得られるだろう恵のことを、ご利益と呼んでいる。

しかし仏教が説く本来の利益とは、自分の望みが叶えられることや、金品が得られることではなく、仏の教えによって得られた精神的恩恵を意味している。さらに、仏の教えを受けて自分が利益を得るということだけでなく、他を益するという、他に恵を与えるという精神と実践が大切なのである。

経営の裏には必ず生身の人間がいる

会社とは社会に価値を創造、提供する装置であり、仕組みである。

会社におけるお金は、人体における血液と同じだ。循環が滞れば病気になるし、枯渇すれば生き延びることができなくなる。けれども、会社はどこまでいっても、人が人に商品やサービスを提供し、その対価としてのお金を受け取って血液としている。経営の裏には必ず生身の人間がいるのである。「お金」ではなく「人」を見る。

ビジネスの場面で使われている仏教の言葉は、そのことを私たちに思い出させてくれる。私たちが普段、何気なく使っている仏教の言葉は、個人の「生き方」のみならず、会社の「経営」や、社会の「経済」にも深遠なる智慧と、大いなる指針を与えてくれるのである。

プレジデント オンラインより

最近の新車に「スベアタイヤ」なぜ装備されない？

運転中にパンクしたらどうする？

かつては当たり前にあった予備タイヤが「オプション化」した理由とは？

最大の理由は、燃費向上を目的とした「軽量化」と、より広い室内空間を求めるユーザーニーズに応えるための「荷室スペースの確保」です。さらに、タイヤ自体の性能が向上し、道路網も整備されたことで、昔に比べてパンクする機会そのものが減少したことも一因と考えられます。

スベアタイヤがない代わりに多くの車には「タイヤパンク応急修理キット」が標準装備されています。タイヤ交換の経験がない人でも比較的簡単に扱え、小さなパンク穴であれば、補修剤を注入して空気を充てんすることで一時的に走行可能になります。ただし、このキットで対応できるのは軽微な損傷に限られ、タイヤの側面が裂けたり、バーストするような大きな破損には使用できないため注意が必要です。

タイヤのパンクは昔に比べて減ったとはいえ、JAF の救援データによると、救援理由の 2 位を占めていて、今なお身近なトラブルのようです。

紅葉狩りの意味や由来は？「何をする」や「なぜ狩りと呼ぶ」

紅葉狩りとは色づいた紅葉を眺めて楽しむこと。紅葉狩りが一般に広まったのは江戸時代中期の頃とされています。ちょうどこのころ、伊勢神宮へお参りする伊勢講や熊野詣などの影響で庶民の間で旅行が流行しました。名所を案内するガイドブックに紅葉の名所を紹介したところ、たちまちそこに人が押し寄せたそうです。

「狩り」とは本来、獣を捕まえる意味でつかわれていましたが、時代の流れとともに小さい動物や野鳥を捕まえるという意味に広がり、さらに果物などを「採る」という意味でも使われるようになりました。やがて「狩り」は紅葉や草花を眺めるという意味でも使われるようになりました。狩猟をしない貴族が現れたのが由来とされています。

当時、身近な環境に紅葉がなかったため、紅葉を楽しむには山や溪谷に足を運ぶ必要がありましたが、貴族にとって歩くことは「下品な行為」とされていたため、紅葉を見に出かけることを「狩り」にみたてるようになったとされています。

今年の紅葉は全国的に平年並みか平年より遅い見頃が予想されています。東北地方は 10 月下旬のようです。